



いよいよ美術館が今月オープンします。多くの美術ファン、特に香月泰男先生のファンにとっては何ものにもかえがたい出来事であり、本町の文化行政にとっても画期的な事であると思います。

そこで今月号のメッセージは、香月画伯への思いや作品から伝わる人柄などについて、掲載してみました。

画伯の作品に関しては、その代表作である「シベリア・シリーズ」の内の何点かを山口県立美術館の常設展示場で鑑賞してきた。画伯の絵のイメージとして「暗さ」があげられるのも、戦争体験をもとに生涯の仕事として貫き通したこのシリーズの印象が強いからであろう。確かに色といふ形といい、絵全体から受ける雰囲気はとも暗い。しかし、画伯は何故そのような絵を描かなくてはならなかったのか、何故描かざるを得なかつ

たのか……。私も、画伯の自伝めいた執筆を読むまでは、本当の意味というものはわかっていなかったように思う。私を含めて、現在日本人の中で戦争を体験していない人間は数多くいる。何事においてもそうであるが、体験なくして真に物事が理解できるかという点、残念ながらそうではないらしい。画伯の戦争中のシベリア抑留体験を読んで、共



夢

ひろがる

湯免地域

vol.2

画家として・一人の人間

としての香月泰男とは

感こそできていても実感がわかないのは平和といえるこの社会に生きる私達のひとつの幸せなのかもしれない。真に画伯の体験や思い出を理解できないにしても、私達は画伯の記した読みもの、描いた絵画作品から少しでも学び得ることができ、過去の過ちを二度と犯さない知識を習得することができる。

画伯の作品に関して、別の角度から見てみよう。

草花、動物、風景、人物、他この世に存在するすべてのものたち……。それらはいずれも画伯の目に映る日常の中からモチーフを得ている。あるときはアトリエの中にある静物を題材に、またあるときは旅先でのスケッチをもとに

～(前文略)～